

葉集を読む

松岡 隆子

鯛雲崩れ易くて暮れやすく

大庭 安代

秋の高空に一面に拡がる鯛雲を見るとしみじみと季節の移ろいを感じさせられる。片雲の白さも、ところどころの秋天の青さも澄みきった秋のものだ。見上げていると自分が小さくなっていくような感じがしてふとさみしくなる。眸先生に「鯛雲二人で佇れば別れめく」がある。鯛雲は秋思を誘う雲のように思える。変化が激しく、形を変えて行きながらいつしか暮れてゆく。「崩れ易くて」と鯛雲の特徴を捉え一元描写で詠みきっている。

身に入むやマスクの顔に泣かれては 鈴木 富代

いまや外出時にマスクをするのは新常态になった。冬場は風邪の予防にもなるし避寒にもなるので重宝だが、普段は概ね鬱陶しい。と言いつつも誰もみな真面目にマスクをしている。マスクをすると顔の半分以上が隠されてしまうが、肝心な目の部分が出ているのでありがたい。目と目の対話で十分心を通わせることが出来る。それにしてもマスクをしたまま涙にくれる顔を見るのは切ない。身に入む思いで受け止めて

いる鈴木さんのマスクの顔が想像される。

カンナあかあか図書館の休館日

岡 美穂

道すがら雨のひかりのカンナの絆

山下なつ子

夏を思わせるような暑い日差しはな赤々と燃えたつように咲くカンナは人目を惹く花だ。「あかあか」「カンナの絆」「カンナ燃ゆ」などとその赤さを強調して詠まれることが多い。普通に「カンナ咲く」と言ったのではその鮮烈な赤さは表現しきれないからだろう。

岡さんの句は「カンナあかあか」と最初の七音でその赤さを描写し、続く五音五音のトーンで休刊日の図書館の静けさを印象づけている。

山下さんの句は、通りがかりに目に入った雨のカンナを美しく描いている。雨を耀かすほどのカンナの赤さが印象的だ。

用件もなきに夜長の長電話

安達みわ子

大した用もないのについ長電話になってしまうことはよくある。気の合った友達や姉妹の場合、よくまあと思うくらい次から次へと話が尽きない。夜長の時間もあつという間に過ぎてゆく。コロナ禍のいま、会って話をすることも会食することも儘ならないなか、せめて電話くらいと互いに長話を楽しむことになる。

教へ子に囲まれて酌む今年酒

高橋いほを

新酒の瓶を提げて教え子たちが訪ねてきた。誰がどうしたとか、あの時はこうだったとか、飲むほどに話が弾む。教え